

栄光と挫折に苦しんだ1年間

第47期 小川海緒

前年度の好成績(ベスト8)を継続することは至難の技であった。昨年ベスト8を経験した者はプロップの河本、ロックの佐藤、SHの江口とわずか3人しかいない。とりあえず、また初心に戻って、基本プレーの徹底を目標に、キャプテンは昨年安定したスクラムワークを示した河本、サブリーダーは負けん気の強いSH江口でスタートした。FWは昨年より小粒であるが忠実なプレーをする高野、タックルに磨きをかける堺が3列となった。BKSはSHを2年生の塚本としSHであった江口はSOに。センターは、昨年の菊池、奥村コンビの抜けた穴は痛い、とりあえずタックルに定評のある2年生の森本となった。

そして新人戦を目前に控えた練習で悲劇が起きる。プロップ河本のセービング練習時に起きた左肩関節脱臼である。

河本は足腰の鍛練目的で企画されたスキー合宿で右の肩関節も脱臼する。プロップにとって肩の脱臼は致命傷である。河本は試合の度に肩を脱臼した。いわゆる脱臼ぐせになっていたのである。

そして関東大会は1回戦京北に圧勝したものの成城学園に完敗。大会後、プロップ河本は思い悩み、退部届けを出した。そしてロック佐藤も受験の為と部を去り、FB田崎も部を去る。

夏合宿を前にして、チームの結束力が弱まり、まさに

危機的状況になってしまった。残された3年生部員は6人。監督を前にして3年生のミーティング。ラグビーを秋まで続ける意志があるのかないのか最終確認。6人全員が続けたいという意志であった。後述となるが、この年から監督は都立大森高校から千歳へ転任となった武田先生になる。それまで指導してきた34期石瀬は夏合宿まで指揮をとり、その後はコーチとして支えることになる。教師とOBのスポーツ教育の考え方の異なりに、我々は迷い、苦しんでいた。

そして最後の都大会予選、やはり準備不足は否めなかった。夏合宿から江口をキャプテンにすえ、彼は彼なりに精一杯チームをまとめる努力を惜しまなかった。しかし、一回戦で涙をのんだ。忠実な動きの高野、劣勢に立たされた時に声を張り上げ勇気あるプレーを示した小川、小さいながらも低いタックルを連発する堺、おとなしいが内に秘めた負けず嫌いの江口、動きは固いが足の速い宮近、夏合宿で太ももを骨折し、見事フルバックでカムバックした尾鼻。

たかがラグビー、されどラグビー、前者をとるか、後者をとるか人それぞれである。しかし、千歳で3年間、苦しさの中であって人の絆を深め、私達は自らを最後までやり抜く姿勢を貫いたことは、今はまだわからないが社会人になってわかる時が必ずくると思っている。